



ILMR

NEWSLETTER

No. 31

発行
2018年3月16日

佐賀大学 低平地沿岸海域研究センター ニュースレター

CONTENTS

- 前海を考えるシンポジウム開催報告
- 佐賀大学 低平地沿岸海域研究センターの廃止について
- シンポジウム「有明海の環境・漁業問題：現状と将来展望」開催案内

本センターは、「低平地・沿岸海域」を切り口とする国内唯一の学術研究機関として、有明海およびその沿岸低平地の諸問題はもとより、アジアの低平地研究の中核的拠点として広く研究成果を発信するとともに、恰好の研究・教育フィールドを活かした国際的・地域的な研究・教育を推進しています。

前海を考えるシンポジウム開催報告

有明海は多くの特徴的な生物が生息し、日本を代表する魅力のある海ですが、様々な環境問題や社会問題のみがピックアップされ、また、「ありあけもの」の漁業が衰退するにつれ、市民が有明海にふれあう機会が減少しつつあります。一方で、近年は荒尾干潟・東よか干潟・肥前鹿島干潟が「ラムサール条約登録湿地」となり、関連した様々な活動が展開するにつれて市民の関心も再び高まりつつあり、市民が有明海を見直す契機になっています。有明海を見直すには、有明海を理解し、実際に海に触れ、見続けることが重要ですが、その手段のひとつとして「市民調査」があります。肥前鹿島干潟でも今年度から調査手法について検討し始めたところです。そこで第六回の「前海を考えるシンポジウム」では「市民調査」の取り組みについて情報交換し、今後の方策を考える機会としたいとという目的で開催しました。

シンポジウムは、2018年3月3日の午後に鹿島市新世紀センター2階の会

議室で開催されました。参加者は鹿島市の方を中心に24名の参加がありました。



まず、藤井特任助教から「前海を考えるシンポジウム」の開催意義、六者協定事業などの説明を行った後、3題の話題提供をしました。鹿島市ラムサール条約推進室の森元さんからは、今年度鹿島市で行った「市民調査」の試みについて話がありました。泥干潟である肥前鹿島干潟においてどのような方法がありうるのか、市民の方々と議論しながら計画していった過程について説明がありました。やながわ有明海水族館の小宮さんからは、ご自身・仲間とどのような調査をしているのかについて、また、調査をした上での「有明海の生き物

の魅力」などについて話がありました。藤井特任助教からは、過去に瀬戸内海で行われてきた市民調査についての紹介、どのように役に立ったのか、現在瀬戸内海で提案されている市民調査のあり方などを紹介した。また、座談会では、

このような3題をもとに参加者皆さんで議論をしました。例えば、市民調査をやるための人材をどうすればいいのか、ネットワークをどのように形成すれば良いかなどの課題についてそれぞれの意見を言い合いました。

このシンポジウムの様子は鹿島ケーブルテレビの番組として放映されることになっていますので、ご覧ください、

佐賀大学 低平地沿岸海域研究センターの廃止について

この度、平成30年3月をもって、低平地沿岸海域研究センターは廃止されることとなりました。これまで低平地沿岸海域研究センターの研究教育活動を支えていただきました関係者の皆様には、厚く御礼申し上げます。来年度より、当センターの教職員は、それぞれ別の部局に移動することとなります。各教職員の部局は変わりますが、これまで同様に研究教育活動は続きます。関係者の皆様には、変わらぬご支援のほど、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

本記事では、各教員の、これまでの低平地沿岸海域研究センターでの活動、そして今後の研究教育活動についての思いを書いています。

山西博幸 教授

当センターは、2010年4月に「低平地研究センター」と学内プロジェクトとして活動していた「有明海研究プロジェクト」が統合し設立されたもので、陸域、沿岸・汽水域及び海域までをカバーする研究組織として生まれました。私自身は前身の低平地研究センターから合わせると17年間にわたり、低平地と沿岸海域の環境に関する基礎的および応用的研究に携わったことにまず感謝したいと思います。とくに、2000年冬季のノリの色落ち問題を端とした「有明海の環境問題」に絡み、当時センター教授であった林重徳先生を中心としたさまざまなプロジェクトに関わらせていただきました

た。その際の多くの方々との交渉・交流は、今の自分自身の研究活動に大いに活かされています。また、官民学で組織された「低平地研究会」の企画運営では、地域住民に「低平地」問題を広く情報発信し、「国際低平地研究協会」では、荒木宏之先生を中心とした国際的情報交換の推進を勉強させていただきました。一方、国内でもユニークな研究機関であった今回のセンター廃止は非常に残念ではありますが、時宜に応じた大学運営の判断を信じながら、これをネガティブに捉えず、発展的解消という立場から、それぞれの研究者がこれまでに培った経験と実績をそれぞれの新たな部局でより

一層推進させることが今後われわれに課された新たな使命であると考えています。「低平地研究」は今後も地域の重要課題であり、これらの研究を通じ、今まで以上に佐賀大学の研究教育活動及び学内外との学術交流の促進、併せて地域社会及び国際社会の持続的発展に貢献していきたいと思えます。

最後になりましたが、当センターへのこれまでのご支援に厚くお礼申し上げますとともに、佐賀県、佐賀市、関連部局の都市工学科教職員の皆様、そしてセンターを陰で支えてきた歴代の事務職員の方々に深く感謝申し上げます。

速水祐一 准教授

旧低平地研究センターと有明海総合研究プロジェクトが合併して今のセンターが船出したのが2010年の春。思えば最初は多難であった。過去のいきさ

つ、文化の違い、法人からの評価、予算。様々な要素が錯綜する中で、徐々に融合して新しいセンターとして育ってきたように思う。ようやくセンターとし

て一体感ある活動ができるようになってきたと感じられるのはここ数年である。苦勞してここまでたどり着いたところでセンターが廃止となることには、

残念な思いがある。このセンターでは、私は一貫して有明海の環境問題・漁業問題について研究してきた。その間ずっと、概算要求プロジェクト分として文科省・大学法人から支援していただ

木村圭 講師

2015年1月に低平地沿岸海域研究センターに着任し、「ハブ型ネットワークによる有明海地域共同観測プロジェクト」として有明海に関わる研究を行ってきました。着任以降の研究では、多くの成果を上げることができましたが、それ以上に有明海を中心とした地域の問題、現状を深く知流ことができるとともに、多くの方々とのつながりを作

藤井直紀 特任助教

わたしは今から7年前の2011年2月に、有明海の研究やサイエンスコミュニケーションの取り組みを目的として佐賀へやってきました。

有明海研究では、佐賀大学による「環境モニタリング」、特に有明海観測タワーの継続的観測のサポートを行ってきました。これにより、インターネットで有明海の状況を地域住民に発信システムを整えることが出来ました。また、そのデータの蓄積も出来てきたので、有明海の特長や変化の把握に向けた解析も行なえるようになったところです。また、わたしが赴任してから有明海の

金相暉 特任助教

私は、2016年12月に低平地沿岸海域研究センター赴任しました。着任以降、これまでに、数値モデルを用いた有明海の環境改善策への提案を目標に、様々な作業を行ってきました。特に、既往のモデルを、感潮域を考慮したモデルへ改良し、有明海における懸濁質構

いたことには深く感謝したい。センターは廃止になるが、概算要求プロジェクト「ハブ型ネットワークによる一長期環境変の機構解明」は平成33年度まで継続する。長期のモニタリング、

ることができました。そして、有明海の重大な漁業問題である赤潮について取り組んできたこともあり、佐賀県地域の水産業を大学研究から支えることを意識して研究に取り組む姿勢を築くことができました。

平成30年度以降、他の部局への異動した後も、これまでの佐賀大学教員として活動して身につけた姿勢である、

重要な出来事となっている「ビゼンクラゲの大発生」についても研究し、その記録をとることが出来たのはひとつの成果かなと感じています。

サイエンスコミュニケーションでは、「有明海研究で得られた科学的知見をどのように地域住民に伝えていくか」という課題を挙げて、その基盤となる「インタープリテーション」に関する試みを行ってきました。特に、「市民の科学講座～有明海学」は6年間も継続することができ、この講座を通じた地域コミュニケーションを形成することが出来ました。

造の再現性向上を試みる研究に取り組んできました。一方で、諫早湾における貧酸素水塊の発生機構に関しては、日本海洋学会の国際ジャーナルであるJournal of Oceanographyの有明海スペシャルセクションへ投稿し、今年2月に掲載されることになりました。

多数の機関の共同研究という本プロジェクトの貴重な利点を最大限に生かして、4年後には有明海の環境・漁業の根本的再生策を提示できるようにしたいと考えている。

地域の水産業を下支えする研究をこれまで以上に進めていきたいと考えています。そして、今まで以上に教育活動や、地域、学内外の交流を促進し、佐賀大学教員として社会に貢献していきたいと思えます。

最後になりましたが、低平地沿岸海域研究センターにご支援いただきました皆様に厚くお礼申し上げます。

これらの活動は、地域の方々のご助力無しには出来ないことでした。様々な形でご助力頂いた方々に感謝しております。

有明海には環境問題・地域社会の問題など様々な課題があり、それらの解決のために「科学」が出来る役割について考え、様々な試みをしてきましたが、まだまだ道半ばです。「低平地沿岸海域研究センター」は廃止となりますが、引き続き何らかの形で「有明海の研究・地域連携」に力を注ぎたいと思っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願いたします。

着任以降、1年余りの間に成果を上げることができたことは、私にとって良い経験となりました。今後、別の部局に移動した後も、有明海環境問題に関連する研究を継続して実施していきたいと考えています。

折田亮 特任助教

低平地沿岸海域研究センターには、2017年1月に赴任してきたため、約1年間と短い期間の所属になってしまったのですが、様々な経験や研究課題に取り組むことができ、貴重な時間を過ごすことができました。特に、赴任時に

掲げていた新たな研究テーマである「貧酸素環境下における底生動物とそれらの捕食者（魚類）との被食-捕食関係を解明する研究」については、野外での実験手法の確立や実際に野外実験データを取得することに成功し、新たな

研究テーマを切り開くことができました。今後、別の部局へと移動した後も、貧酸素環境下における海産生物に焦点を当てた研究活動に取り組んでいきたいです。

シンポジウム「有明海的环境・漁業問題：現状と将来展望」開催案内

有明海的环境問題・漁業問題については、10年ぶりに国の有明海・八代海等総合調査評価委員会の報告書が発刊されましたが、未だに問題発生の主たる要因は未解明な点が多く、実効性ある

再生策も見いだされていません。本シンポジウムでは、有明海地域共同観測（COMPAS）のこれまでの研究成果を中心に、こうした問題の実態と発生機構、さらにはこれまで解明された発

生機構に基づいた再生方策の可能性について、研究者以外の一般市民・行政等に広くかつわかりやすく紹介し、最新の学術研究成果に基づいた今後の有明海問題の解決への道筋を示します。

日にち： 2018年3月17日（土曜日）13:00～

場所： 佐賀大学理工学部6号館都市工学科大講義室

【口頭発表】

有明海における生物・水産資源をめぐる問題の現状と今後の再生方策（有明海の底生動物群集とその形成

有明海で発生する赤潮の動向とその機構

有明海の貧酸素化はなぜ進行したのか？

潮受堤防の建設から20年：諫早湾の海洋生態系はどうなったのか？

有明海的环境・漁業の再生への道筋について

このほか、ポスター発表数件が行われます。

是非お越しください。

2017年度COMPAS成果報告シンポジウム
有明海の環境・漁業問題
～現状と将来展望～
主催：佐賀大学低平地沿岸海域研究センター

2018年
3月17日（土）
13:00-17:50

概要
有明海の環境問題・漁業問題については、10年ぶりに国の有明海・八代海等総合調査評価委員会の報告書が発刊されましたが、未だに問題発生の主たる要因は未解明な点が多く、実効性ある再生策も見いだされていません。本シンポジウムでは、有明海地域共同観測（COMPAS）のこれまでの研究成果を中心に、こうした問題の実態と発生機構、さらにはこれまで解明された発生機構に基づいた再生方策の可能性について、研究者以外の一般市民・行政等に広くかつわかりやすく紹介し、最新の学術研究成果に基づいた今後の有明海問題の解決への道筋を示します。

場所 佐賀大学 理工学部6号館都市工学科大講義室

プログラム
13:00～13:05 開会挨拶：寺本理事（佐賀大学）
13:05～13:15 質疑・趣意説明：遠水祐一（佐賀大学低平地沿岸海域研究センター）
13:15～13:55 招待講演
有明海における生物・水産資源をめぐる問題の現状と今後の再生方策（概要）
総合観測（有明海地域共同観測）の現状と今後の展望：遠水祐一（佐賀大学低平地沿岸海域研究センター）
13:55～14:25 有明海の底生動物群集とその形成 遠野雄策（佐賀大学）
14:25～15:55 有明海で発生する赤潮の動向とその機構 木村康（佐賀大学）
15:55～16:20 休憩・ボクスタ-立ち会い説明
16:20～16:50 有明海の貧酸素化はなぜ進行したのか？ 山口一（九州大学）
16:50～17:30 潮受堤防の建設から20年：諫早湾の海洋生態系はどうなったのか？ 小園田智大（熊本県立大）
17:30～17:45 有明海の問題：漁業の再生への道筋について 遠水祐一（佐賀大学）
17:45～17:50 終了の挨拶 藤井直紀（佐賀大学）

お問い合わせ
佐賀大学低平地沿岸海域研究センター
〒840-8502 佐賀県佐賀市本庄1
TEL/FAX 0952-28-8846 E-mail medusa@cc.saga-u.ac.jp

● ● ● 編集後記 ● ● ●

2011年3月11日。日本を揺るがす大震災がありました。あれから7年、日本は復興にむけて歩んでいます。このような出来事があると、低平地研究も、防災研究も、海洋研究も日本には欠かせない研究だなと感じます。低平地沿岸海域研究センターは本年度で廃止されますが、スタッフ一同、別の形で頑張っていければと思います。今回で最終号のニューズレター、ご覧いただきありがとうございました。（花粉症に負けている藤井より）

発行・編集

佐賀大学低平地沿岸海域研究センター
〒840-8502 佐賀市本庄町1番地
TEL 0952-28-8582 0952-28-8846
FAX 0952-28-8189 0952-28-8846
E-mail ilt@ilt.saga-u.ac.jp
ホームページ
<http://ilt.saga-u.ac.jp>